

①

「どうもあなたのそぶりや言葉から考えると、あなたには一人になりたがる何か特別の理由がありそうだ。私の知らない理由がね。それをいつてくれませんか」

クレージュ殿はながいあいだ奥方にそれをいわせようと骨折ったがむだらしかった。奥方がうまいとすればますます夫の好奇心をつのらせるばかりで、そのあげく、奥方は目を伏せたままじつとだまりこんでしまった。それから急に夫の顔を見つめて口をきった。

「あたしがお話しする勇気のないことを、そんなに白状しろときつくせめないでくださいな。いままでにお話ししようと思ったことも三度はあるのです。ただあたしの年ごろの女が後見をしてくれる人もなくああいいう宮中に出ているのは危険なのだということだけをお考えになつてください」

「あなたは何ということを私に想像させるのだろう。それははっきりいってあなたに腹を立てるだろうと思つて私が口によろ出さないようなことだが」

奥方はだまっていた。その沈黙で夫は想像したことの実であることがわかってしまった。

「何もこたえませぬね。それじゃあ私の想像するのとおりだということですね」

「そうなんです。あたしは今まで女が夫にしたこともない告白をあなたにこれからいたします。あたしの行為と気持の潔白なことが、あたしにその勇気をあたえてくれますから」奥方は夫のひざもとにくずおれてそう言うのだった。「たしかにあたしが宮廷から遠ざかっていたい理由があるのです。そしてあたしの年ごろの女がよく落ちこむ危険をそうして避けたいと思います。あたしは今まで一度も自分の弱い心をそとに見せたことはありませんし、もしこのまま宮廷生活から遠ざかることを許してくださいれば、今後もそういうことは決してないと思つています。母君が生きていてあたしの後見をしてくださるあいだはよかったですけれど。あたしの決心していることがどんなに危険であっても、あたしはあなたにふさわしい妻でありたいために、この決心を捨てないつもりでいますの。あなたを不愉快にするような気持をあたしがもつていとお思ひになつたら、どうかお許しになってください。少なくとも行為のうえでは決しておいやなようなことはしませんから。こんな告白をするのは普通のひと以上の友情や尊敬を夫にもつてはじめてできることだということをお考えになってくださいまし。あたしをかわいそつだと思つて、導いていってください。そしてあなたにできることだつたら、やはりあたしを愛してくださいまし」

この告白のあいだクレージュ殿は顔を両手でささえたまま心のうつろの人のようにきいていて、奥方をたすけ起こすことも忘れていた。奥方が話しおわつたとき初めて目をそのほうにやり、

自分のひざのところで涙に顔をぬらして泣きくずれている妻を見てこよなく美しいものに思つた。苦痛に死にそうな心地の殿はやつと奥方をたき起こしながらいった。

「あなたこそ私をかわいそうだと思つてくださいよ。そう思つてくれてもいいとおもう。あなたのしてくれた誠実な告白にふさわしいように私が答えないとしても、それは私の受けたはげしい苦痛の衝動のためですから、どうか辛抱してください。あなたのように尊敬され嘆賞されていい女はおそらく世の中にないでしよう。しかしそう思つても私はやはり世の中でもっとも不幸な男だと思つてますよ。私はあなたに会つた最初の日から激しい恋をしてしまった。あなたがこんなに貞淑でも、あなたをちゃんと自分のものにしていても、私の初めごろの恋は消えてしまつていない。まだ燃えつづいてるのだ。私は今でもどうしてもあなたに恋させることができない男だった。ところがあなたはいまだれかよその男に恋を感じそうだといつて心配しているでしょう。そういう心配をあなたにさせる幸福な男はだれなんです。いつからその男はあなたに気にいつているのですか。あなたに気になるためにどういうことをしたんだろう。あなたの心にしのびこむためにどういう道その男を見つけたのですか。あなたの心は元来恋にうごくことは決してないのだ、と思つて私は自分にそういう力のないことを慰めてもいたんだが。それなのに私のできないことをよそのある男がしとげたのだ。(……)」

②

「(……)なぜヌムール公を恋しているなどと告白してしまつたのですか。はずかしいことをいふようだが、私はあなたにだまされてもいい気であなを愛してられる男だつたのだ。あなたに目をさまされる以前の偽りの平穩な目がなつかしくてたまらない。世間の多くの夫がうけているような、ああいいうおめでたいのんきな気持に、なぜいつまでもおいといてくれなかつたんです(……)」